

奈良朝文化の戯画性について

博物館美術課長 野 間 清 六

只今は、森本先生から奈良朝上代美術につきましまして、非常に該博な蘊蓄を傾けられましたお話を伺ひました。私も何かさういふ本格的なお話を申上げることがよいのかも知れませんが、今日はかういふ表題でお話申上げたいと思ひます。この表題は「奈良朝文化の戯画性」となつてをりますが、私の申上げるのは「奈良朝美術の戯画性」といふ意味におとり願ひたいと思ふのであります。美術専門の者がこのやうなふざけた題目を選びまして申しわけありませんが、専門家でない森本先生が却つて本格的なお話をして下さいましたので、お話が重ならなくてすみませうことは偶然の幸ひと思つてをる次第でございます。

この申上げたい「奈良朝美術の戯画性」の、戯画といふのはこれは落書のことです。さういふ美術の中に落書を樂しんでをるといふ気分が非常にこの時代は多いのであります、そのことを多少実例を引いてお話申上げたいのが私の今日の趣旨でございます。

その前にこの奈良朝の美術といふものが非常に優れたものであるといふことは皆様も御承知のことと思ひますが、それにつきまして少し実例で申上げておきたいと思ふのであります。

先程森本先生からもいろいろお話がございましたが、とにかく日本の美術史の上でこの奈良朝の美術くらゐ品物も沢山残つてをり、又優れた作品の残つてをるといふことは、他の時代にはないのであります。建築にいたしましても、彫刻にいたしましても、絵画、工芸品等に亘りまして、実にこの時代はいろいろなものが沢山残つてをるのであります、われわれは非常にさうした豊富な遺品を持つことによつて世界的に十分に誇り得るのであります。それから又遺品が豊富なだけでなく、それらがどれも非常に優れたものであり、さういふことが又この時代の美術の大きな特色であります。それではどうしてこの時代の美術が優れてをるのかと申上げますと、これはこの時代くらゐこの美術といふものが国家の財力

と、それから権力の保護を受けたといふ時代は一寸ないのであります。それは御承知のやうに当時の仏教といふものが精神面におきまして指導性を持つてをりましたし、又その半面に大陸の文化を仏教がいろいろと輸入いたしました一つの文化的な指導力といふものを示してをりましたことが非常に勢力を得ましたことと、それから当時は大化の改新以来の中央集権といふものが漸く実を結んで参りました時で、その国家の強力な財力と権力とによつてこの仏教が保護されたのであります。そのために自然その仏教美術が非常な保護を受けたのであります、こういう時代は外の時代には殆ど見られないのであります。

後の時代にもいろいろと美術が作られました。それは或ひは一貴族とか一高僧の保護によつて作られたものであります。で、こんなに国家的な強力な保護を受けたといふ時代はないのであります。多少後の桃山時代におきまして豊太閤が現はれまして、あの英雄主義的な気持からいろいろと保護をいたしました。非常に豪華な桃山美術といふものを生んだのであります。併しその時もこれは豊太閤秀吉といふ一個人の英雄主義から来たものであります。どちらかといへば個人の示威的な、一つの威力を示すための芸術とも申すべきもので、大きな邸宅を立てるとか、その内部を絢爛とした絵画で裝飾するとか、さういふことが行はれましたが、それらはやはりその個人の一つの趣味からできたものであります。ところが

この奈良時代の仏教といふものは個人のものではなく、仏へ奉仕として営まれたものであります。そこに最大の保護が加へられたのであります。

さういふところにこの時代の芸術には非常に豪華、雄大なものが表はされてをるのであります。それから又その美術の内容がこの時代は非常に豊富なものを持つてをる。これは大陸からいろいろな芸術要素がもたらされて、それがいろいろと織込まれてをるために、非常に内容の豊富なものになつてをるのであります。それでこの美術史の長い流れの上におきましてこの時代の美術は内容的にも非常に豊富であり、規模の上におきましても非常に雄大でありましてそこに芸術的なもの健全な姿が見られるのであります。

先程森本先生が肉附のいいほつてりした彫刻といふものは余り好かないと言つてをられました。彫刻の美しさにはいろいろの形式があり、さうお感じになるのも結構でありますけれども、どちらの彫刻が一般に普遍性があるか、誰にも好かれるかと申しますと、これはやはり肉附の豊かな動きのある、人間性のあるものの方が一般性があるのではないかと思ひます。これは飛鳥の芸術と奈良の芸術との、高い低いをいふではありませんが、どちらが理解し易いかと申すのであります。奈良朝の美術の方が理解し易いのはそれだけ人間的なものを持つてをるからと云へます。飛鳥の彫刻のやうな超現実的な美しさといふものではありませんが、非常に現実

感の強い芸術であるところに今の人にも分り易いものがあるのであります。又外国の人たちにもそのために理解され易いものがあるのであります。さういふ点で奈良朝の美術は日本の美術におきましても非常に大切なものでありまして、日本の美術はいつも行詰るとこの奈良朝の美術に復帰することによつて新しい道を発見するやうないろいろの経緯を示してをるのでございます。御承知のやうに鎌倉時代におきまして平安時代の非常に弱々しい芸術が新しく立直る時にはやはりこの奈良朝の精神に帰ることによつて新しい進路を発見したのであります。それから明治の日本の美術の復興もやはり天平美術に帰ることによつて、立直つて今日のやうな美術の隆盛を見たのであります。

御承知のやうにさういふことを言ひ出したのは岡倉天心先生でありまして、天心先生は非常に奈良文化の崇拜者でありまして、当時の美術学校の教授とか生徒の制服も奈良朝式の服装に似せて作られたほどでありました。丁度今日の裁判官が着るやうな服装であります。あれが美術学校のできたときの制服でありました。

岡倉天心先生はその当時の校長でありましたが、馬に乗つてああいふ服装をして学校へ通はれたのでありまして、そのくらゐ奈良朝文化に心酔されたのであります。このやうに日本の美術の上におきましての奈良朝の芸術といふものの役割は大きなものでありまして、現在もやはりさういふ理解のもの

とに奈良朝美術は尊敬され又研究もされてをるのであります。

併しその奈良朝美術の見方といふものがどうかすると表面的になりましてその内面的なものを見落してをる、又形の上だけを見てその内に潜むものを忘れてをる、さういふ欠陥があるやうに思はれるのであります。この芸術を理解するといふことはその表面の形に現はれたものだけを見てゐては本當に理解されないものでありまして、さうした優秀なものがどうして生れたか、さうした芸術の生れた基盤になるもの、さういふものを知る必要があるのであります。又さうした優れたものがどうした気持で作られたか、これを知ることが非常に大切なのであります。さうした基盤になるもの、気分的なもの、その理解にはなかなか入つて行かないのであります。

それで最近でも奈良朝の芸術をいろいろと研究されてその真似をしたものも相当作られてをりますが、それは形を真似てをるに過ぎないのであります。そのテクニクをいろいろと調べてそれを繰返してをるに過ぎない。さうしたものは作られても全然別なものでありまして到底その奈良朝の優れた芸術のよさには及ばない。これは何故かと申しますと先程申し上げましたやうにその生れて出た基礎のもの、その気分といふものを知らずに外面的なものだけを見てをるからさういふ結果になるのであります。これは奈良朝の美術だけに限りませんが、すべての芸術を理解する上におきまして非常

に大切なことであります。

日本の洋画を見ましても非常によく外国の新しい形式とか、そのテクニクを取入れてをるのでありますが、併しヨーロッパでさういふふうな形式とか、技巧とかが生れた本当の環境といふものを知らず、全然別な環境でその形式とか、テクニクだけを日本で模倣してやつてをるのでありますから借り物のものしかできないのは当然なんでありました。又よく洋画家がフランスあたりへ参りますが、向うでは非常にいいものができるのでありますが、帰つて参りますと色が濁つたり、筆が鈍くなつたりして非常に作品が落ちて来る。これなども滞欧中は向うの生活の雰囲気に入つてをるから自然それにマツチした作品ができる、日本へ帰つて来ると環境が違つて来るから自然違つたものに変つてしまふのであります。

さうしたことから知られますやうに、その基礎になるものを知るといふことが非常に大切でありまして、いい芸術を知らうとするには形式とかテクニクといふものを学ぶことも必要であります。同時にその基礎になるものをよく研究し、どうした気分からさういふふうなものが作られたかといふことを理解して、むしろ内面的なものの方を追究した方がいいんじゃないかと思はれるのであります。

それで私はさういふ問題を皆さんに多少とも理解して頂きたいと思ひまして、この時代にある落書のことをお話申上げたいと思ふのであります。

この戯画といふものは実は奈良朝に非常に多いのであります。外の時代にこんな沢山戯画がある時代はないのであります。この戯画といふものは今日でも便所とか、それからよく癖などに書かれて残つてをりますが、さういふものは段々壊されていつかなくなつてしまふ。今日かういふふうな戯画といたしましてはもう江戸時代のものすら殆どないくらゐなんでございます。ところが奈良時代は非常にさうしたものが沢山残つてをる、これは残さうとして残されたものではなく偶然残つたものであります。又これが発見されたのも偶然の機会から発見されたのでありますがさうしたものが相当残つてをる。だからこの時代には実際どれほど多くのさうした戯画が作られたかもう想像も及ばないのであります。当時の人は非常な落書好きであつたといふことが言へます。まあ落書をするやうな非常に自由な屈託のない気持であつたといふことがさうした遺品から知られるのであります。

さてこの奈良時代の一番古い戯画の遺品として挙げられますのは近年発見されました法隆寺の金堂の天井から現はれた落書であります。これはあの建築を解体いたしましたして初めて発見されたのであります。法隆寺の天井は御承知のやうに格子天井になつてをります。これは格子の上の板をはつた天井でありまして、この格子で隠れる部分にいろいろ落書がしてあつたのであります。それは天井を外して見て発見されたのであります。今まで下から仰いでは見えない部分にあつた

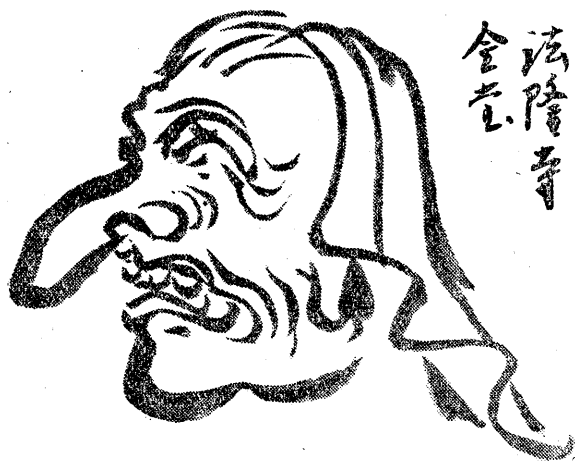
のであります。この落書にはいろいろ文字もございませうが絵が非常に沢山ございまして、どんな種類の絵があるかと申し上げますと、一番多いのは人の顔であります。男の顔が多い、女の顔が少なくお婆さんのやうな顔が一つ画いてある、それから動物では馬の頭とか鹿の頭、それからその足のやうなものがあるところ書いてあります。それから飛雲のやうな形とかも画いてあります。

それから又これも落書に非常に通有な男根とか陰部のやうな性器も画かれてゐます。さうしたものが後世のやうに卑猥な感じを起させない画き方をして、むしろ見てゐて素朴な健康美といふやうなものを感じさせる描き方があります。そんなものがこの落書の中に見られるのであります。これは一体どういふやうな人間が画いたかと申しますと、天井の格子の中の蓮華の模様を描いた工人が仕事の合間にさうしたものを画いたと思はれるのであります。筆なども相当立つてをりますから普通の者では画けない、やはり多少絵心のあるものぢやないと画けない落書でありまして、これは後で見えないところだといふので暇な時にさういふものを画いたと思はれるのであります。これは神聖な仏殿の中でありまして、然も仏像を安置する上にあるものであります。さういふところを構はずからした落書をしたといふところにこの時代の工人の一つの心理といふものを窺ふことができるのであります。それからこの法隆寺金堂の天井の戯画を奈良時代の初期の例と

いたしましたのは、法隆寺の金堂はいろいろ説もございませうが、私は再建されたものと考へてをりますので奈良時代の初期の例として御紹介した次第であります。

それから第二の戯画の例といたしましてはこれも法隆寺にございまして、厨子の中に入つてをる押出仏の光背に画かれてをるのであります。この押出仏といふのはこれは銅板にレリーフしたものでありまして、型の上に置きまして叩き出したものでありますので「押出し」と呼ばれてをるのであります。

法隆寺
金堂



この戯画は墨で仁王様のやうな形、一つは大体完全に画かれてをりますが、片方の方は足の先だけが画かれてをるものでありまして、これも普通には見えないところであります。この方は別に題材はさうふざけたものぢやなくこれは恐らくかうした押出仏を作つた工人がやはり仏様の守護者として仁王様のやうなものがあつた方がいと思つてさうしたいたづらをしたのではないかと思はれます。筆者は画家ではなく、さういふ金属に加工する工人がやつたものでありますから絵なども非常に拙く、たどたどしいところがありますが、それが如何にも人間味のあることと考へられるのであります。非常に大切な仏像の裏であります、さういふところへ、さうした落書をするといふところに非常なルーズと申しますか、屈託のない気持が現はれてをるのであります。

それから第三の遺品として申上げたいのはこれももと法隆寺に伝へられまして、後に皇室に献納されまして現在はこの博物館に保管されてをります伎楽面、この伎楽面の上に画かれてをるものであります。この伎楽のことを御説明すると長くなりますが、これは現在では行はれてをりませんがこの奈良時代に非常に盛んに行はれました仮面をかぶつた一つの野外劇でありまして、大陸からさういふものが伝へられたのであります。その伎楽面の中に一つでき上つてゐない未完成のものがあるのであります。その未完成の面のこの額のところ

に女の顔が墨の細い線で画かれてをるのであります。これは非常にこわい顔をしてをる面であります、この額の女の顔を見ますとなかなか美人であります。

伎楽面（旧浄物）



これは恐らくこの面を画く工人が画いたものと思はれるものでありまして、これは荒削りした面であります。これからもう少し細かく彫らうとして眉とか、それから目とかいろいろな皺、さういふふうなものの下図を作つてをるときに、筆

の遊びでつい女の顔を画いたのであります。これなどもでき上るときには削られる部分でありますから、これは鉋屑になつてなくなつてしまふものでありますが、そのために気楽に画いたのであります。それが偶然未完成のまま残されたために今も女の顔を残してをるのであります。恐らくこれはかういふ恐しい表情の顔を拵へてをるときでありますから何だか語らなくなつて逆に美しい女の顔でも思ひ出して、ついさういふものを画いたのではないかと思はれるのであります。これはさういふ点で非常に珍しい面でありまして、よくかうした未完成の半出来のものを今日まで伝へて来たものだと思つて非常に感心するのであります。

これによつて昔の彫刻がどういふ過程で作られたかがよく分るのであります。でき上つたものだけではそれがどういふふうで作られたかといふことは分らない、併しこの未完成のものによりまして、荒削りしておいてそこへ筆で線を拵へて又彫つて行く、さういふことを何回か繰返して一つのものを作つて行くといふことがこれによつて分るのであります。その点これは非常に貴重なものといへるのであります。

それからその次はやはりこれも伎楽面であります。これは正倉院の方の伎楽面の獅子の耳にやはり女の顔が画いてある。これは未完成のものぢやございませんが、普通見えな部分に画いてある。この方の女の顔は眉を擧げてゐて美人ぢやありません。どういふ氣持でかういふ顔を画いたのかこれ

は分らないのであります。夫婦喧嘩でもして泣いたやうな女房の顔を思ひ出して画いたのかも知れませんが、とにかくさうした顔が画いてありなかな筆もよく立つてをります。

それから第五に御紹介申上げたいのは、これも正倉院の中にある文書の最後のところに、一人の男が非常に怒つて目をむいてをる絵であります。またその上のところに「大々論」と書いてをる、これは大喧嘩といふ意味であります。恐らくこれは側で誰か仲間同志で大喧嘩をしてをるのを見てかういふスケッチをしたんだらうと思ふのであります。併しそれが人に果して喧嘩をしてをるふうに見えるかどうか分らないので、「大々論」と書いたのではないかと想像されるのであります。勿論これは最後のところでありまして、ここに軸を付けて捲込めば中の方に入つて見られないものではあります。が、さういふところにかういふふうないたづら書をしてをるのであります。

その次に御紹介申上げたいのは唐招提寺の金堂にある仏像の台座にあるもので、これは第六の例になりますが、この奈良の唐招提寺といふお寺は御承知のやうに盲目の聖僧鑑真和尚が開かれた寺でありまして、この寺は天平宝字三年にできたものでありますから、奈良朝のどちらかといへば後期の例になるのであります。その金堂には毘盧舎那仏始めいろいろな仏像が沢山並んでをりますが、その中の梵天和帝釈天の台

座にいろいろな落書があるのであります。この台座の隠れたところにもいろいろな落書があることが大正六年に発見されたのであります。

この台座は丁度六角形になつてをりまして場所も広い、そのためいろいろな落書がされてをるのであります。顔なんかもいろいろございませす。それから馬とか、馬の顔などはなかなかよく画いてをるのであります。それから珍しいのは蛙がどんな

気持でか画かれてゐる。蛙の漫画といふと高山寺の鳥獸戯画を思ひ出すのであります。この唐招提寺の中にすでに蛙のいたづら書がしてあるのであります。

その蛙などは（絵を画いて）かういふふうな簡単な線であ



りますが実によく蛙の特色を捉へてをる。また兎も何匹か描かれてゐます。それからいろいろな人の顔などもあつてこの台座の落書は非常によく画かれてをるのであります。恐らくこれは仏体が木像の彩色したものでありますから、この彩色をし



唐招提寺



をいたづら描きしたと思はれるのでありまして、筆もなかなかよく立つてをるのであります。

以上申上げましたやうにこの時代の美術品には非常に落書が沢山残つてをる。然もそれが神聖な仕事に携つてゐながら構はず描かれてをるところに注目されるものがあります。これが一つや二つの例でありましたならば特殊な例と考へられるのでありますが、こんなに沢山実例が残つてをるといふことを考へますと、この時代の工人といふものはさうした落書をするやうな、気楽な気持で品物を作つたんぢやないかといふことが言はれるのであります。これは実は非常に大切なことでありまして、今のわれわれの考へ方から申しますと優れた作品といふものは非常に真剣な、真面目な気持で作られたやうに考へられるのでありまして、到底こんな余裕のあるふざけた気分などは入る余地がないやうに考へるのであります。ところが實際はさうした余裕のある気持ぢやないと本当のいい作品は作れないといふことが結果からわかるのであります。この制作といふものを自分の生活と切離した、別な非常に特殊なものにしたときには自分といふものがその中に十分注ぎ込めない。その制作と自分の生活といふものがこの落書で見ますと殆ど一致していい作品を作つてをるといふことが正確である。その時には欠伸をするでありませうし、居睡りもするかも知れないし、又かういふふうな落書をする気持になればそれまでです。その制作と生活が非常に打溶けたも

のになつてをる、さういふところにこの当時の優れた美術が生れたのではないか、さういふ気持を実は皆さんに考へて頂きたいと思ふのであります。

私はこの美術の上でさういふことを申上げますが、これはやはり文学の上におきましてもさういふことが言へるんぢやないかと思ふのであります。私は文学のことはよく存じませんが、萬葉あたりの歌の中には特に文学を作らうとか、優れた歌を作らうといふやうな気持よりも生活それ自身を詠つてをる。それがどういふふうの人に思はれようとか構はずに自分の感情を吐露してをる、さういふところに後では優れた文学といふものが生れるのではないかと思ふのであります。

さういふふうな余裕のあるところに人間味のある芸術といふものが生れて来る、さうした率直な人間性といふものがやはり時代を隔てても人の心を惹くのではないかといふふうに考へられるのでありまして、さういふ意味で当時の美術、或ひは文学なり、さうしたものを考へになるときに、さうしたものはかうした気持から作られたといふことを考へ願ひたいと思ふのであります。

大分時間も経ちましたので簡単に申上げますが、それではかうした、戯画性、戯画をするやうな自由な制作気持といふものはその後どういふふうになつたかと申しますと、平安朝に入つて参りますと非常にこれは真面目な嚴肅なものになつてしまふ、これは密教の影響であります。この密教といふも

のは非常に神秘主義を唱へましたために、彫刻をすればその木、絵を画けばその衣の神聖さといふものを如何にも大切にされたために非常に堅苦しいものになつた、ふざけた気分をななくしてしまつた、そのために段々芸術といふものが人間性のないものになつた。さうした傾向の一つの反動といつたしてよくこの時代の絵巻物の中には、その画中の人物が一種のふざけたやうな気持をしてをることが多いのであります。沢山の行列が画かれるとすると、その行列の中には仲間同志で話をしてゐるものがをるとか、烏帽子が落ちさうで手をやつてをるものがあるとか、或ひはどつかこの辺に蚤でもゐて痒くて搔いてをるとか、さういふふうなふざけた場面を画いてをる、さういふところに多少戲画的な精神といふものは見えてをるのであります、段々さういふふうなものになつて来る。よく鎌倉時代は奈良朝精神を復活したと申しますが、それは形の上で多少影響を受けたのでありまして、かうした自由な気分といふものは本当は復活してゐないのであります。その例にここに申上げたいのは有名な彫刻家の運慶の書いたお経が残つてをるのであります。法華経であります……、それは運慶願経といふふうに呼んでをりますもので、その奥書に寿永二年といふ年記や写経した様子が詳しく書かれて居ります。それによるとこのお経は運慶が信仰心の余りにお経を書いたのであります、その軸木は清水寺の焼けた古材を用ひ、硯の水は三井寺の水を汲んで来ていて、一つ一つにさ

ういふ因縁を尊び、お経を写してをるときには坊さんを沢山招んで来てお経を読ませてゐます。

さういふふうにこの時代は一つの物を作るのに非常に形式を喧ましく言つて、何と申しますか仰々しいものにしてゐます。彫刻家の運慶がさういふ気持でありますから、彫刻などもやはりさうした非常な仰々しい形式の中に作られたことが察せられます。昔のやうな自由さといふものは到底復活できなかつたのであります。現在もやはりこと芸術に關しますと非常に堅苦しいものやうに考へ、昔は氣樂に描かれた席画のやうなものも、今は芸術を冒瀆するものやうに考へてをるのであります、この芸術といふものはもつと樂な氣持で作られるものであります、余り堅苦しい窮屈なものになつては、永久に脉動してをるやうな芸術は生れないのぢやないかといふふうに、実はこの上代の美術といふものを考へます時に感じますので、さういふ点一つよく皆さんにお考へ願ひたいと思ふのであります。

— 27・10・26 —

附記——右は上野の博物館に於ける本会主催講演会の速記だが、野間先生の前に「美術と文学との關聯」と題して森本が話した。その中で、飛鳥美術の崇高神秘性と天平美術の写実性とを比較して、後者が悪写実に陥つた例や過大な肉附が醜悪感を起させる実例のある事を挙げて非難した。それに対して野間先生が論及されたわけである。この二時期の優劣論は永年未決の問題で、改めて論評する機会を得たいと考へてある。(森 本 治 吉)